

史料紹介 「嘉永六年 表方御右筆間 日記」(一)

「篤姫養女一件寸考」

崎山 健文

はじめに

鹿兒島市の尚古集成館に、近世中期から明治期にかけての奥日記二八三冊が所蔵されている。そのうち近世のものは、大きく三種類に分類できる。藩主を中心に鹿兒島城本丸の様子を記した「表方御右筆間日記」、同じく藩主の鹿兒島城以外での様子を記した「御滞在 日記」、藩主の家族で特定の人物を中心に記した「○○印(○○様) 日記」である。これらは、いずれも対象者の私的な側面(動静・贈答・冠婚葬祭等)を描いた公的な日記である。但し、いずれも国許の日記であり、江戸藩邸での藩主の様子や、在府の家族について記したものではない。本編では「嘉永六年 表方御右筆間 日記」(以下、「日記」と記す)を翻刻・紹介する。同年は、今和泉島津家(以下、今和泉家と記す)の娘であった篤姫が十一代藩主斉彬の養女となって鹿兒島城に入り、さらに將軍家定の御臺所となるべく江戸へ上る年である。本稿では篤姫を軸に「日記」の概略を紹介したい。尚、紙面の関係で、本号では七月分までを掲載する。

一 「於市」から「篤姫」へ 一月～五月

嘉永六年(一八五三) 正月は藩主斉彬が在府中であり、鹿兒島城の主

は斉彬の子典姫であった。したがって、篤姫が鹿兒島城へ入る六月五日まで「日記」も典姫を主体に記されている。斉彬が着城する六月二十二日以降は「日記」の主体は斉彬となる。典姫は側室すまを母として前年五月二十七日に鹿兒島城で誕生しており、この時まだ二歳である。三月には「御初雛」(三月三日条)、五月には「御立初」(五月二十七日条)といった行事について記載がある。

四月に入ると篤姫が斉彬の娘として披露されるため、それまで江戸からの知らせ等は典姫へ報告されるのみであったものが、篤姫にも達せられるようになる。正式に披露されるのは四月五日であるが、ここで篤姫の今和泉家時代の呼称について簡単に考証したい。同年の「典姫様日記」(尚古集成館蔵)に

「今和泉於市様事、今日篤姫様ト被仰出候ニ付(後略)」(四月五日条)

という記述がある。ここでは篤姫が「於市」と名乗っていたことがわかるが、これまでは「斉彬公史料」・「島津氏族源姓和泉氏嫡流系図」(東京大学史料編纂所蔵)を根拠に「於一」と考えられていた。しかしこれらはいずれも編纂物であり、一次史料である日記の記載を無視することはできない。また「豎山利武公用控」・「島津斉彬書状」・「表方御右筆間 日記」(嘉永四年・尚古集成館蔵)にも「於市」又は「お市」とあり、

「於一」が使用された史料は現在のところ他に確認できない。さらに天保七年（一八三六）の「表方御右筆間 日記」（尚古集成館蔵）に興味深い記事が存在する。

「貞鏡院様御事 勝姫様

右之通御改名被遊候段申来候条、勝之字并^二同唱之文字、可致遠慮旨申渡候」（八月五日条）

勝姫とは九代藩主斉宣の子から十代斉興の養女となった人物で、浜田松平家に嫁ぐが、その後死別し鳥津家に引き取られる。これはその際の達であり、新たに「勝^{カツ}姫」と名乗る事となったため、同字又は同唱の文字を名前に使用することを禁ずるとの内容である。篤姫は天保六年の生まれでこの時すでに誕生しているが、本家の姫君に対して明らかに格下であり、少なくともこれ以降は「かつ」と名乗る事はなかったであろう。以上のことから、嘉永六年段階では「於市」という文字が使用され、一般的読み方をすれば呼称は「いち」であった可能性が高いと考えられる。「日記」には本丸奥女中の「あつ」が、四月五日に「御差合ニ付」、「あさ」と改名されていることも一例として註記しておきたい。

さて篤姫の本家入りに戻る。四月五日に斉彬の娘として披露された篤姫であったが、今和泉家からの養女としてではなく、表向きはあくまでも実子として扱われている。これは養子では側室として受け入れられる恐れがあったための措置であり、斉彬の書状からそれをうかがうことができる⁵。また篤姫の鹿兒島城大奥入りと秋頃の参府について準備するよう同時に達せられている。参府については長姫の例に倣って進めるよう指示されているが、長姫（聰姫・棚倉藩阿部正篤室）とは斉宣の娘で、文化十一年（一八一四）に弟啓之助（後忠剛・篤姫実父）と共に参府し

た人物である。

この日以降、鹿兒島城入り・参府の準備が進んでいく。五日には早速本丸御年寄永瀬初めより御祝儀が進上せられ、それに対して今和泉家からは本丸大奥へ使いとして江澤が送られ、本家の姫君としての取り扱いと交際が始まる。同二十二日・二十三日には本丸奥女中十八名が今和泉家を訪れる。顔合わせのようなことが行われたのであろうか。これ以降、篤姫又は今和泉家と、典姫又は本丸奥女中との間の贈答は度々行われる。一方、江戸藩邸からは迎えとして御年寄小の嶋等が四月十日に出立し、途中京都で六名を召し抱え、薩摩へ向かっていた（五月十日条。鹿兒島城到着は六月六日）。今和泉家からも篤姫附として三名が定められる（五月二十一日条）。また御験（御印）は「富印」と定められた（五月二十七日条）。五月二十九日には、翌月五日の本丸入りに先立ち今和泉家からお道具類が運び込まれ、そのチェックのため今和泉家より女中等が上っている。篤姫の手回り品は「今日より篤姫様御仕立物御かせいとして上り」（六月二十五日条）とあるように本丸で整えられた品もあつたが、全てが本家で新調されたわけではなく、今和泉家からの品も相当数あつたことがわかる。

二 本丸入り 六・七月

六月五日、篤姫は今和泉家を出て本丸へ移居する。この日は松壽院（種子島家）・周防（後の久光・重富家）・弾正（久珍・種子島家）、さらには篤姫の実父母安藝（忠剛）夫婦が登城し、篤姫と面会する。このうち周防・弾正はすぐに御暇するが、他の三名は残って食事等まで伴にしている。松壽院は「日記」中に度々登場するが、斉宣の娘で種子島久

道（文政十二年没）に嫁いだ人物である。「松壽院殿御初御五方様」と度々記されるが、「五方」とは、松壽院・楽水（重富家隠居・斉宣男・松壽院弟）・安藝（斉宣男・松壽院弟）・周防（斉興男・松壽院甥）・弾正（斉宣男・松壽院弟）を指しており、これらの筆頭に記されていることになる。松壽院の血筋は当時本家に次ぐものであり、種子島家はその血筋故に嘉永五年十一月「一世御一門方同様被仰付⁶」ているが、「日記」からは「同様」どころか松壽院が一門四家（重富・今和泉・垂水・加治木）の上位に位置しているかのような印象を受ける。また垂水家・加治木家は、種子島家を含む他の三家と異なり、当主が本家からの養子でないためか、「日記」全体を通して本家との交際の記事が極端に少ない。これらを併せて考えれば、家格よりもむしろ本家との血筋の遠近が重要視されていたことが指摘できる。またそれは男女の性差に関係しないことも指摘できる。ただ、後に松壽院が事実上の当主として種子島家の政治を切り盛りすること等を考えれば、個人の才覚による部分も今後検討すべきであろう。尚、松壽院は典姫の「御初雛」・「御立初」にも登場しており、国許における言わば母親のような役割をも果たしている。これは斉彬着城の際、篤姫・典姫と伴に斉彬を城で迎えていることから推測できよう（六月二十二日条）。

篤姫と今和泉家との関係にも着目すべき点がある。六月五日に早速安藝夫婦が登城面会しているが、その後も頻繁に贈答がある。さらに六月十五日には安藝が、七月二日には安藝奥方が本丸に上って篤姫に面会するなど、その交際は密である。七月十五日には篤姫から「生身魂」として安藝夫婦へ「御重の内」・「御銚子」が進ぜられる。生身魂とは盆の風習で、存命の両親に対し食物などを贈る行為を指すが、篤姫は斉彬と安

藝夫婦にそれぞれ行っている。先述したように篤姫は表向きには実子として取り扱われたが、それは幕府に対する姿勢であり、国許では実家との密な付き合いが許されていたことがわかる。

さて次に篤姫の生活をうかがわせる部分を紹介する。六月十五日、典姫とともに「御角藏」から祇園祭を見物する。翌十六日には「御稽古初」として伊木七郎右衛門が召されているが、後に篤姫が斉彬の前で御香の稽古を披露した際も同人が召されていることから、御香の稽古初めのことであろう（六月二十四日条）。尚、同人は後に「御香其外御けいこ申上候」とのこと、斉彬から特別に褒美をもらっており（八月二十日条）、御香を中心としながらも他にも色々稽古をつけたものと考えられる。七月に入り、篤姫は六日から一週間余り体調を崩すが、同二十七日には磯へ滞在中の斉彬のもとを訪れている。この際のことには、「磯御茶屋 御滞在日記」（尚古集成館蔵）に、

「御庭ニ而御慰ニ焼物・硝子細工被仰付御覧あそはし、夫より花倉御拜見ニ被為人候」

等と記されている。この時、松壽院も磯を訪ねている。

これと並行して八月二十一日の鹿兒島出立に備え人的準備も整えられる。七月一日には御側御用人として向井新兵衛が江戸へ伴することが決定し、同四日には篤姫付きとして改めて五名が任じられる。うち三名は先述の今和泉家からの者である。さらに同九日には江戸へ伴する奥女中として小の嶋初め十四名が決定し、二十八日からはそのうち鹿兒島出身の者が順次数日間の御暇を頂戴し、江戸上りに備えることとなる。

おわりに

以上、七月分までの篤姫を中心とした動きを概観した。他にも、本丸大奥の仕組み、奥を通じた本家の交際の範囲・質とその役割、藩主の暮らし等、着目すべき点が多い。しかし、単年度の日記の検討だけで全容をつかむのは困難であり、今後玉里島津家所蔵の二の丸右筆日記も含めて多年度の解読作業が課題である。

付記

翻刻にあたっては五味克夫氏、堂満幸子氏のご指導・ご助言をいただきました。また史料の閲覧と掲載にあたっては尚古集成館副館長松尾千歳氏、同学芸員岩川拓夫氏に種々お世話いただきました。鹿児島大学の丹羽謙治氏には資料をご教示いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

註

- (1) 『東京大学史料編纂所報 第七号』(一九七三)に拠る。
- (2) 『鹿児島県史料 斉彬公史料一』二六二(一九八二)
- (3) 『鹿児島県史料 斉彬公史料四』豎山利武公用控八(一九八四)
- (4) (1)に同じ 四七一 島津久寶宛 嘉永六年四月二十二日
- (5) (1)に同じ 四五八 島津久寶宛 嘉永五年十一月二日
四六九 伊達宗城宛 嘉永六年
- (6) 『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』四五九

例言

- 一 本稿は尚古集成館所蔵「嘉永六年 表方御右筆間 日記」を底本とし、これを翻刻するものである。
- 一 漢字は原則として底本に従ったが、一部当用漢字に改めた。
- 一 変体仮名は普通の仮名に改めたが、江・茂・者・与など一部はそのまま用いた。
- 一 平出・擡頭・欠字は原則として底本に従った。
- 一 编者註は()で示した。
- 一 適宜読点「、」および並列点「・」を付した。
- 一 ルビは底本にあるもののみ付した。
- 一 三段組みで体裁を整えたが、読みやすさを考慮し、段の間に線を入れた。

(表紙)

嘉永六年丑ノ正月元日より

日記

表方

御右筆間

(中表紙)

嘉永六年丑ノ正月元日

表方

御右筆間

正月元日天気

於御書院

宰相様

太守様

若殿様 御蔭

典姫様 江

御蓬来

大服之御茶上り

御祝儀申上候、

御祝儀申上候、

御年寄初

御次并ニ

御番人迄

御廣敷

御用人

御歯堅

一式御三献三ノ御膳迄上り、

一長柄之御銚子 御加

一八種之御飯

一柄差之提子

一御力飯

一大節句 二ノ御膳迄

一柄差之提子

一土器御臈煮

一御吸物 掛御盃

一御銚子

一御肴

一御盃 土器

一御銚子

一御押

一太守様 御影

一典姫様江上り、

一御祝御膳

一典姫様江上り、

一吸物・御酒・御さしミ・数之子被下候、

御年寄初

御中臈

表使迄

惣中江

一さしミ・数之子・酒被下候、

一御肴 一折

一典姫様江

一松壽院殿御初

御五方より春ニ付御進上被成候、

一御さかな 一折

一右御五方より被遣候、

永瀬初
役々江

正月二日天気

於御書院

宰相様

太守様

若殿様 御影

典姫様江

御蓬来御茶上り

御祝儀申上候、

御年寄初

御次并ニ

御番人迄

御肴 一折

典姫様より

松壽院殿御初御五方へ春ニ付被進候、

一同 一折

右御五方江

春ニ付進上、

永瀬初
役々より

濱崎

亀の

一御祝儀ニ上り

一御とし玉

一のり姫様江

松壽院様より御進上、

正月三日天気

於御書院

御両殿様

若殿様 御影

のり姫様へ

御蓬来御茶上り

御祝儀申上候、

御年寄初

御次并ニ

御番人迄

正月四日天気

垂水御屋鋪より五家奥方よりの御使として上り

藤岡

御さかな 一折

五家

奥方より

永瀬初

役々江

春ニ付被遣候、

御肴 一おり

五家

奥方江

役々より

春ニ付進上、

正月五日天気

今日ハ

のり姫様外御庭へ御神参りあそはし候、御供申上候、

永瀬

園川

葉山
あつ
初

正月六日天気

於御書院

宰相様

太守様

若殿様 御影

のり姫様

御蓬来御茶上り

御年越之御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

御そは

御福茶上り

正月七日天気

於御書院

御両殿様

若殿様 御蔭江

典姫様 御出座

御蓬来御茶上り、

若草之御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

御雑吸

御盃 土器

御銚子

御押

太守様

典姫様江上り

御柱こよみ

樂水殿 (忠公・重富家隠居 青豆男)

松壽院殿

安藝殿 (忠剛・今和泉家 青豆男)

周防殿 (久光・重富家 青豆男)

彈正殿 (種子島久珍・青豆男)

兵庫殿 (久長・加治木家)

讃岐殿江

参らせられ候、

永瀬初へも

同 被下候、

正月八日天気

御官位御昇進候ニ付、先月十九日江戸急ニ而被差立候松脇孫兵衛・外老人今日到着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来候、此旨

典姫様へ申上候様御廣敷御用人へ可申渡候、

正月八日

(島津久淳)
石見

十二月十五日、於江戸

太守様御奉書御到来被遊、十六日ニ御登 城被遊

候処、

從四位上中将ニ御官位被為仰蒙候段、芝奥より申

来ル、

正月九日雨天

若年寄 花の

若年寄格 (斎藤御室) すま

御中臈格 ひて

表使 た河

御半下 壱人

右来五年、御国元江被差越候条、此旨御年寄より相違候様御廣敷御用人江申渡、可承向江(行方)え可申渡候、

十一月 (川上八村) 筑後

右之通り被仰渡候間此段申越、以上、

十一月十七日 名越彦太夫

御国元

御側御用人衆

御側役衆

京都御留守居

大坂御留守居

今日

松壽院殿御年頭ニ御上り被成、

典姫様江御對面あそはし候、

御蓬来御茶上り、

御雑煮

御吸物 御掛盃

御銚子

一 御祝御膳上り、

一 御惣菓

一 御吸物

一 御硯ふた物

一 さしみ上り、

一 御肴 一 おり

一 御人きやう

一 松壽院殿より

一 典姫様江被進候、

一 御さかな 一 かこ

一 松壽院殿より

一 被下候、

一 御年頭ニ上り、

永瀬

その河

役々江

(斎藤御室) 誠忍院

法苑院

静尾院

袖浦

藤江

千尾

富の

典姫様江御目見へ被仰付、

御吸物・御酒・御取肴・御菓子、其外いろく被下候、

正月十日天気

正月十一日天気

一 御鏡開ニ付、

一 於御書院

一 御両殿様

一 若殿様

一 典姫様 御出座

一 御蓬来御茶上り、

一 御祝儀申上候、

御年寄初 御次迄

一 御戴餅

一 御かちん

一 御雑煮

一 御盃 土器

一 御銚子

一 御押

一 太守様

一 典姫様江御上り、

一 雑煎・取肴被下候、

永瀬初 惣中江

一 江戸表去十一月十九日被差立候間便今日着致、

御揃被遊御機嫌克被為入候段申来ル、

正月十二日天気

一 典姫様御乳今日永之御暇にて下宿致候、

正月十三日半天

正月十四日雨天

御年越三付

於御書院

御両殿様

若殿様

典姫様江

御蓬来御茶上り、

御祝儀申上候、

御そは

御福茶上り、

正月十五日天気

於御書院

御両殿様

若殿様

のり姫様 御影

御熨斗御茶上り、

御祝儀申上候、

赤之御粥

御盃 土器

御銚子

御押

太守様

のり姫様 御蔭江上り、

一銀 二両

被下候、

御年寄初
御次迄

御年寄初
御次迄

御年女中へ

同

のり姫様より被下候、

御鉢肴

進上、

今日御暇戴下り、

暮前上り、

御年女中へ

御年女中より

かち

正月十六日半天

正月十七日半天

正月十八日雨天少々雪

正月十九日天気

正月廿日天気

御代参 上方廻り、

園川

正月廿一日天気

御代参 下方廻り

葉山

江戸表先月廿九日被差立候御飛脚今日着致、

御揃被遊御機嫌克被為入段申来ル、

旧臘廿九日江戸被差立候式日中急山本半之進・外

老人今朝到着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来ル、此旨

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

正月廿一日 石見

正月廿二日天気

正月廿三日天気

一大中様江御参り申上候、

永瀬

そて

かち

ミ尾

初ね

やよひ

正月廿四日天気

正月廿五日天気

智光院様百回御忌御法事、来廿九日より晦日迄福

昌寺御執行有之候間、御法事中殺生令停止候旨申

渡候、此旨大奥女中江可申聞旨御廣敷御用人江可

申渡候、 正月 石見

正月廿六日雨天

正月廿七日雨天

江戸正月三日被差立年頭の御飛脚着致、

御揃被遊御機嫌克被為入候段御左右申来ル、

一去ル三日江戸被差立候年頭中急山田五右衛門・外

老人今曉到着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来ル、此旨

典姫様江申上候様御廣敷御用人へ可申渡候、

正月廿七日 石見

正月廿八日半天

一 御三殿様

のり姫様 御影

一 御のし御茶上り、

一 御禮申上候、

御年寄初

御次迄

正月廿九日天気

一 御重の内一

松壽殿より

典姫様江おり柄の御機嫌御伺として被進候、

一 御かこの内

一 御酒

松壽院殿より

永瀬

その河江

被遣候、

正月晦日天気

二月朔日天気

一 御三殿様

のり姫様江

一 御のし御茶上り、

御礼申上候、

御年寄初

御次迄

二月二日天気

一 御代参

葉山

二月三日雨天

二月四日雨天

二月五日雨天

二月六日半天

一 春之御祝儀ニ上り、

仲津

茂と

御次吉人

一 狛子

周防殿より被遣候、

永瀬

園川へ

二月七日天気

二月八日天気

一 松壽院殿御事、今日八ツ後より二ノ丸御拜見ニ御上り被成、

のり姫様江御對面被成候、

一 御行器 一 荷

一 御鍋物

一 御てふし

松壽院殿より

のり姫様江被下置と御進上、

誠恐院

上り、

一 東道盆

一 脚

一 御酒 一 樽

安藝殿より御尋として被遣候、

永瀬

園川

葉山初

御中臈

表使江

二月九日半天

二月十日半天

一 御暇戴下り候、

暮前上り、

あつ

二月十一日天気

二月十二日半天

一 田の浦へ参り候、

園河

葉山

あつ

杉の

ミヤ

ミ尾

御末向人

二月十三日天気

法苑院
静尾院

二月十四日天気

二月十五日天気

一 於御書院

宰相様

太守様

若殿様

のり姫様

一 御のし御茶上り

一 御禮申上候、

一 御さかな 一 おり

一 御籠の内

たる水

一 両奥方より

被下候、

二月十六日天気

二月十七日雨天

二月十八日天気

二月十九日天気

一 御いとま戴下り、

御年寄初

御次迄

永瀬

その河

葉山

あつ

澤田

杉の江

た代

暮前ニ上り、

一 とまり御戴下り、

二月廿日天気

一 御かこの内

周防殿より折柄の御尋として被遣候、

永瀬
園河

二月廿一日天気

一 今日より一廻りの御暇にて下り候、

かえ

一 御番人歌事、病氣にて御養生御暇戴居候処、快氣致

今日上り候、

一 大中様江参詣致候、

園河

二月廿二日天気

一 江戸表より間便着致、

御揃被遊御機嫌克被為入候段申来ル、

一 御肴 一 かこ

垂水両おく方へ

おりからのにて進上致候事、

永瀬
園河初
役々
あつより

梅
為

二月廿四日天気

一 重富より御使ニ上り、

のり姫様御初難ニ付被進物御座候ニ付、御方御帳
めんへ印置候事、

仲津

一 中仙道・木曾路日数拾七日

一 川下り 老日

一 大坂滞在中三日

一 中国路日数拾五日

一 九州路日数拾三日

右者若年寄華の其外女中、当年御国元江被差越候
付、右之通被仰付候条、此段申達候、以上、

丑正月廿九日

名越彦太夫

御国元

御側御役衆

一 御肴 一 折

垂水御初難ニ付進上申上候、

永瀬
園河
葉山
あつ
澤た
杉の

一 今日間便江戸表より着致、御内證難御道具下り候
事、

二月廿三日天気

二月廿五日半天

御香 一 おり

松壽院殿江おり柄の御機嫌伺として進上申上候、

その河

葉山

あつ

杉の

今日上り

御番人

梅

為

二月廿六日天気

今日上り、

御番人

かえ

紀伊一位様御逝去之段、從

公儀被仰渡候、依之普請者令一日、鳴物者来月二

日迄令停止候、此旨大奥女中江可申開旨、御廣敷

御用人江可申渡候、

二月廿五日 石見

二月廿七日天気

二月廿八日天気

宰相様

太守様

若殿様 御蔭

のり姫様へ

御熨斗御茶上り、

御祝儀申上候、

永瀬初 御次迄

今和泉より御使として

上り、

のり姫様江被進物御座候、右ハ寶印御帳へくハし

くハ印置事、

二月廿九日天気

兵庫殿出生之男子岩松殿と名附被申候、此段表迄

申上候、以上、

二月廿九日 二階堂源太夫

種子より御使ニ上り、

かめの

被進物等ハ寶印御帳めんニ印御座候、

来月二日

寶臺院様五十年御回忌御法事、於惠燈院寺役一日

執行被仰付候間、此旨御問合申上置、以上、

丑二月廿九日

三月朔日天気

宰相様

太守様

若殿様 御影

のり姫様

御熨斗御茶上り、

御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

御重の内 二重 草餅 煮染

御白香 五盃ツ、

松壽院殿

樂水殿

周防殿江

彈正殿江

のり姫様より御初難ニ付被進候、

一安藝殿へハ昨廿九日より御私領ニ御差越候ニ付、

廿八日ニ右之通被進候、

御硯ふた 御菓子 御煮染 森ませ

御酒 十盃樽

御家老

若年寄

大目附

御側御用人

御側役江

御硯ふた・御酒

右之通當年初而の御難ニ付、

のり姫様より被進并ニ被下候事、

先月十日江戸被差立候中急今朝到着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来ル、此旨

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申候、

三月朔日 豊後

種子より御使ニ上り、

御のり手籠

萩の

彈正殿より御持越被遊候とて

永瀬

園河

葉山初

あつ

役々江

被遣候、

三月二日天気

三月三日天気

於御書院

宰相様

太守様

若殿様 御影

のり姫様

御熨斗御茶上り

御祝儀申上候、

一草餅

一御盃 土器

一御銚子

一御押

太守様 御影

のり姫様江上り、

一のり姫様御初難ニ付、

松壽院殿

周防殿

彈正殿御拝見ニ御上り被成、

御年寄初
御次迄

御熨斗御茶上り

御茶御菓子上り、

御組附御吸物

御銚子上り、

周防殿

彈正殿ニハ直ニ御暇被成候、

御難拝見被仰付候、

一 拝見ニ上り、

一 濱崎より御供へも拝見被仰付候、

一 御書院ニ而

一 御茶御菓子被下候、

御家老

若年寄

大目附

御側御用人

御側役江

御廣敷
御用人初

奥廻りへ

誠恐院

豊昌院

法苑院

静尾院

袖うら

藤江

千尾

富の

龜の

ゑた

志人

御次

御家老

御廣座ニ而右同断被下候、

若年寄
大目附へ

御側御用人初

御側役江

御書院ニ而

太守様 御影

のり姫様

松壽院殿へ

御吸物 掛御盃

御てふし

上り、

御吸物

御てふし

御硯ふた物

御さしみ

御井物

御二度御三度上り、

御下別被下候、

誠恐院初

参上人江

伊木

七郎右衛門

山口右源太初

御廣敷御用人

本勤

奥医師

御廣敷医師

被召、御吸物・御酒・御取肴・御さしみ被下候、
右之人數江

一 御たはこ 一包

一 同 一包

一 同 一包

周防殿より御手みやとして被下候、

一 さかな代 百疋

一 松壽院殿より

一 御重の内 御さしみ 草餅

一 御酒 一樽

一 垂水御初雛ニ付被遣候、

永瀬 園河江

葉山 澤た 杉の江

あつ初 そて かち 御右筆間へ

永瀬初 役々江

永瀬

園河

葉山

あつ

澤た 杉の江

澤市 関の市

右兩人江

一 のり姫様より被下物・進上物等ハ寶印御帳めんへ

一 青銅 百疋ツ、

被下候、

一 印置候事、

一 仕支ハ御側迄きかへ模様

三月四日雨天

三月五日天気

一 重富より御雛拜見ニ上り、

三月六日天気

三月七日雨天

三月八日半天

三月九日半天

三月雨天(十日脱カ)

一 御重の内 一組

一 御酒 一樽

一 誠徳院殿御七回御忌ニ当らせられニ付

一 安藝殿より

御次 とも

仲津 もと

御番人 壱人

壱人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

御番人

被遣候、

五わ包

一 中官香 一わ

一 成徳院殿江

御備へ申上度、今和泉江出候、

一 御野菜 一おり

安藝殿江御機嫌伺として進上、

尤当分御私領江御越被成御留主ゆへ、御帰りの上

右御品出候へ者、今日の品留置候事、

三月十一日天気

三月十二日天気

三月十三日半天

三月十四日天気

三月十五日天気

一 御両殿様

若殿様 御影

のり姫様江

一 御熨斗御茶上り、

一 御祝儀申上候、

一 宿下りの御暇戴候、

暮前上り、

永瀬初 役々より

御側 御年寄初 御次迄

御側 御次

御側 御次

御側 御次

御側 御次

御側 御次

御側 御次

御半下
桜

一 四月五日

右御首途

一 四月十九日

右御発駕

右者当年御国許江之御暇被 仰出候て、右之通

御首途

御発駕可被遊旨被 仰出候段申来候、此旨可承向

江可申渡候、

二月 石見

三月十六日雨天

一 御内用之儀有之、去ル朔日江戸被差立候仕立町飛

脚今日到着、

御惣方様益御機嫌よく被遊御座候段申来ル、此旨

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

三月十六日 (島津久喜)
豊後

三月十七日天気

三月十八日天気

三月十九日雨天

一 御暇戴下り、暮前上り

永瀬

三月廿日天気

一 御肴 一 おり

一 御酒 一 樽

御使ニて

安藝殿より

被下候、

三月廿一日天気

三月廿二日天気

三月廿三日雨天

一 御いとま戴下り、暮前ニ上り

三月廿四日雨天

一 田の浦江参り候、

御側てや

御末

永瀬

ミきわ

初ね

あやめ

三月廿五日雨天

一 先月廿九日江戸被差立候式日中急成松伊兵衛・外
老人今日到着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来ル、此旨
典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

三月廿五日 豊後

三月廿六日天気

三月廿七日天気

三月廿八日雨天

一 宰相様

一 太守様

若殿様 御影

のり姫様江

一 御熨斗御茶上り

一 御祝儀申上候、

一 御次女中

御年寄初

御次迄

御番人

ため

右之通被 仰付候、

三月

一 御次御番人被召拘へ候、名もしかと被下候、

(徳川慶福)
一 紀伊中將様御養母

(徳川春風室・近衛忠熙女)
観如院様御所勞之處、御養生不被為叶、先月廿四

日御逝去ニ付、

太守様ニ者御姪之御續、

宰相様ニ者御孫之御續ニ而御定式之御忌服被遊御

請、

若殿様ニ者御従弟之御統ニ而御定式之御忌服被遊御請筈候得共、七歳御未滿ニ付一日被遊御遠慮候段御到来候、依之 御一門方并 種子嶋彈上殿、諸大身分、其外月次御禮罷出候面々、明後廿九日登城、席々謁ニハ

御三殿様江被奉伺御機嫌候格ニ而被仰付候、

但御中途并江戸江兼而伺御機嫌被申上来候面々者、毎之通明後廿九日飛脚便被申上、御女中之儀茂同断可被申上候、

右之通表方江致通達、奥掛・御勝手方江茂可相達候、

三月廿七日 豊後

三月廿九日半天

御内用之儀有之、去ル十二日江戸被差立候急飛脚式人今日到着、

御惣方様益御機嫌克被遊御座候段申来ル、此旨

典姫様へ申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

三月廿九日 豊後

一 御はな

一 御菓子

一 ひわ

(御姫、斎宮女、近衛忠熙室)
常興善院様御拜月ニ付、御備へ申上候、

誠恐院より

三月晦日天氣

四月朔日天氣少々くもる

一 宰相様

一 太守様

若殿様 御蔭

のり姫様

一 御熨斗御茶上り

一 御祝儀申上候、

一 大中様江参詣致候、

御年寄初

御次

あつ

御末

壱人

四月二日天氣

四月三日天氣

四月四日雨天

四月五日天氣

一 篤姫様御事、今和泉家ニ而御成長被為 在候処、

此度 思召之趣有之、御本丸御住居被 仰出候、

此旨向々江 可致通達候、

四月 豊後

一 篤姫様

右先年於御當地御出生之

御女子様、御虚弱ニ被為 在、御届被扣置候処、

追々御丈夫被為成、今般

(英姫、斎宮正室)
御前様御養被仰出御届被 仰上、右之通奉称候、

左候而當秋比御参府可被為 在旨を茂被 仰上

候、

一 暲姫様

(斎宮女)
右於江戸御出生之

御女子様、前条御同様御届被扣置候処、追々御丈夫被為成、今般

御前様御養被 仰出御届被 仰上、右之通奉称候、

御前様御養被 仰出御届被 仰上、右之通奉称候、

御順之儀ハ

(斎宮女)

勝姫様 篤姫様 暲姫様与被仰出候、右之通被仰

出候段御到来、左候而右之通御丈夫之御届被為濟

候ニ付、御役人限并ニ詰衆明六日登城、

御両殿様

若殿様江御祝儀席々謁ニ而被申上候格ニ被仰付候、

右之通表方江致通達、奥掛・御勝手方江茂可相達

四月 豊後

一 篤姫様

右先年於御當地御出生之

御女子様、御虚弱ニ被為在御届被扣置候処、追々

御丈夫被為成、今般

御前様御養被 仰出御届被 仰上候、右之通奉称

候、左候而當秋比御参府被為有候旨ヲ茂御届被

仰上候、

一 暲姫様

右於江戸御出生之

御女子様、前条御同様ニ而御届被扣置候処、追々御丈夫被為成、今般

御前様御養被 仰出御届被 仰上、右之通奉称候、御順の儀者

勝姫様 篤姫様 暁姫様与被仰出候、右之通被 仰出候段御到来候、此旨可奉承知候、左候而篤・

暁之字并ニ同唱迄茂遠慮可仕候、此旨表方へ致通 達、奥掛・御勝手方へも可相達候、

四月 豊後

別紙三通之通被仰渡候間、此段致通達候、以上、

四月五日 猪飼御太郎

御廣敷御用人

一 篤姫様御事、御本丸大奥御住居被 仰出候附、御手當相掛候儀者取しらへ申出候様可申渡候、

四月 豊後

一 篤姫様當秋比御参府付而ハ、

(寄直女・御倉番主阿部正篤室) 長姫様御参府之御例ヲ以御行列其外之儀致吟味、奉伺候儀者其通ニテ諸事無手拔取計候様、

御沙汰被為 在候段申来候、此旨可承向江可申渡候、

四月 豊後

御使奥向

有馬次郎右衛門

覚

篤姫様江

御取次

猿渡加左衛門

太守様

宰相様より

右江

御口上、今般

御前様被遊御養、目出度被 思召、御祝儀御使ヲ

以被仰進候、

四月

御使御抱守之場ニテ

奥向

有馬次郎右衛門

覚

篤姫様江

御取次

猿渡加左衛門

若殿様より

右江

御口上、今般

御前様被遊御養、目出度被 思召候、御祝詞御使

ヲ以被仰進候、

四月

御使御廣敷番之頭

小倉三左衛門

覚

篤姫様江

御取次

猿渡加左衛門

御前様

(寄直女・佐土原藩主島津忠徹室) 隨真院様

勝姫様

暁姫様より

右江

御口上、今般

御前様被遊御養ニ目出度被思召候、御祝詞以御使

被仰進候、

四月

御使御廣敷番之頭

小倉三左衛門

覚

篤姫様江

御取次

猿渡加左衛門

暁姫様より

右江御口上、今般

御前様被遊御養ニ目出度被思召、御祝詞御使を以

被仰進候、

四月

太守様

宰相様

御前様

若殿様江

御使

御廣敷御用人

隨真院様

勝姫様
暁姫様江

御使

御廣敷御用人

篤姫様より

右

篤姫様御事、此度

御前様被遊御養候御祝詞、右以御使被仰進候、

一 暁姫様江

篤姫様より

御使

御廣敷番之頭

右

暁姫様御事、此度

御前様被遊御養候御祝詞、右以御使被仰進候、右
之通御祝詞被仰進候間、仕出相済候段江戸同役共
より申越候間、被申上候儀共毎之通被取計度御座
候、以上、

御側役衆

御使番

御使御側役

覚

一 鯛

篤姫様江

太守様より

右江

御口上にて今日 御名被進候ニ付被成御祝、御使

ヲ以

御目録の通被進候、

四月

一 御着

右ハ今日今和泉ニ而

篤姫様御弘め被為有候ニ付、御祝儀為進上申上候、

永瀬

園河

葉山

あさ

澤た

杉のより

ゑ澤

一 今和泉より御使として
上り、

一 御さかな

一 御酒

一 御重の内

一 組
今和泉より被下候、

永せ初
右人数江

一 御差合ニ付

あつ事
あさと

改名被仰付候、

四月六日雨天

一 御次ニ而御呉服之間老人被召拘へ、名も

やすと

被下候、

一 御次御番人染事鉄、しか事作と改名被 仰付候、

一 明七日

(雁七郎・奇異男)

光臨院様三拾三回

(知姫・奇異女)

光前院様式拾五回

御法事、於惠燈院寺役執行被仰付候間、此旨御間

合申達候、以上、

四月六日

一 御花

光臨院様

光前院様江

右御法事ニ付御備へ申上候、

四月七日天気

御代参

四月八日天気

四月九日雨天

四月十日天気

四月十一日天気

四月十二日天気

四月十三日雨天

御代参

四月十四日天気

御着

一 籠

葉山

永瀬初
役より

園川

御菓子 一重

篤姫様江

典姫様より御滞在中の御機嫌伺被進候、

御さかな 一籠

篤姫様江御滞在中の御機嫌伺として進上申上候、

永瀬

その河初

役より

四月十五日雨天

御両殿様

若殿様

のり姫様

御熨斗御茶上り、

御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

御さかな 一かこ

御酒

篤姫様よりおりふし御到来被遊候とて被下候、

役より

御茶

周防殿より

永瀬

園河へ

四月十六日天気

四月十七日天気

四月十八日天気

四月十九日天気

のり姫様御乳持老人下宿致、同老人被召拘へ候、

名被下候、

せい

四月廿日天気

御次女中きく事此節差合ニ付、

きたと

改名被仰付候、

今和泉より御使ニ上り、

ゑ澤

四月廿一日雨天

四月廿二日雨天

今日ハ今和泉へ被召出候、

園河

葉山

あさ

かち

た代

うた

ため

初音

さくら

御番人

御次

御半下

御肴

篤姫様江

一おり、鯛二枚すへ

園河

葉山

あさ

同 一折

安藝殿御初へ

園河初
御側迄より

進上、

一御さかな代 三百疋

一 園河へ

一同 二百疋ツ、

一 葉山

一同 百疋ツ、

一 かし

一同 二百疋ヲ

一 御次御末 四人江

安藝殿御初より

右之通

一同 百疋

一 園河

一 葉山

一 篤姫様より被下候、

四月廿三日天気

一 今日も同断被召候、

一 永せ

一 澤た

一 そて

一 てや

一 きく

一 ミ尾

一 御半下 三人

一 御肴 三折、鯛二枚

一 篤姫様へ

一 永瀬

一同 澤た初より

一同 三折

安藝殿御初へ

進上、

御さかな代 三百疋

同 二百疋

同 二百疋

同 二朱一片ツ

安藝殿御初より

同 百疋

篤姫様より

右之通被下候、

御肴 一かこ
四月廿四日天気

松壽院殿御陽治(湯治)より御帰殿被成候ニ付、御機嫌御伺として進上申上候、

干わらひ

右人数より

永せへ

澤た江

そて
てやへ

御次・御半下
五人

永瀬
澤た初へ

永瀬
園河初
役より

おはし

松壽院殿より

被遣候、

御使ニ上り、

四月廿五日天気

四月廿六日天気

四月廿七日天気

今和泉より御使ニ上り、

御さかな 一かこ、菊の花

今和泉大奥方より

被遣候、

四月廿八日天気

御三殿様

典姫様江

御のし御茶上り、

御祝儀申上候、

去ル四日江戸被差立候式日中急大山郷兵衛・外ニ
老入今日到着、
御惣方様ますく御機嫌克被遊御座候段申来ル

永瀬初
役江

亀の

惠澤

永瀬
園河初

先日出候
人数江とて

御年寄初
御次迄

候、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

四月廿八日

(喜入久通)
多門

一 四月廿二日

右當年就

御下國、右之通被相替可被遊

御発駕旨被

仰出候段申来候、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

四月 多門

太守様御官位御昇進付、口 宣 宣旨御頂戴之御使京都江被差越、御献上物等御先規之通被為濟、

口 宣等相渡、二月廿六日被遊御頂戴候段御到来候、此旨

篤姫様江申上、御祝詞之儀者明後朔日式中急便

御三殿様江被仰上候様御廣敷御用人江可申渡候、

四月廿九日 石見

四月廿九日天気

四月晦日天気

一 今日今和泉江馬追通り拝見ニ参り候、

永瀬
あさ

一 御さかな代 二百疋

一 同 二朱一片ツ

御側 杉の
御番人 かし
御次 初め
きた

初ね
ため
さくら
きさらき
あつまや
ミとり

杉のへ

御側御番人

むめ

御次

かえ

御次

みや

御次御番人

さく

御半下

如月

東屋

ミとり

右之通
安藝殿より被下候、
一 東道盆 一脚
安藝殿御初御惣方へ

進上致候、

永せ
あさ
杉のより

五月朔日天気

一 御両殿様

若殿様

のり姫様 御影

一 御熨斗御茶上り、

一 御祝儀申上候、

御年寄初
御次迄

五月二日天気

一 重富より御使ニ上り、

仲津

五月三日天気

一 御内用之儀有之、先月廿日江戸被差立候仕立町飛
脚今日到着、

御惣方様益御機嫌(マモ)克能被遊御座候段申来候、此旨
篤姫様

一 典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

五月三日 石見

五月二日

右者當年就

一 御下國御差支之儀被為 在、右之通被相替可被遊

御発駕旨被 仰出候段申来候条、此旨

一 篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

五月 石見

御年寄格

すま

一 右者御国許へ被差越候旨被 仰出置候処、不快ニ
付被成御免候条、此旨御年寄より相達候様御廣敷
御用人江可申渡候、

但仕廻料之儀者被下切被仰付候、

三月 筑後

右之通被仰渡候間、此段申越候、以上、

名越彦太夫

三月廿二日

御国元

御側御用人衆

御側役衆

五月四日天気少々雨

五月五日雨天

一 於御書院

宰相様

太守様

若殿様

のり姫様 御影

一 御熨斗御茶上り、

一 今日の御祝儀申上候、

御年寄初
御次迄

一 粽

一 御盃 土器

一 御押

一 御鏡子
太守様
のり姫様江上り、

一 覚

篤姫様江
太守様
宰相様
右江

御口上、端午之御祝儀目出度被 思召候、御祝儀
以御使被 仰進候、

五月

覚

一 篤姫様江

若殿様より

右書同断

五月

覚

篤姫様江

御使奥向

御使
御抱守之場ニ而
奥

御使
御廣敷番之頭
竹下傳左衛門

御前様
随真院様

勝姫様

暲姫様より

右書同断

一 篤姫様御枕しやうふ、今和泉江相廻候事、

一 ちまき

一 しそつけ

周防殿より

被下候、

永せ
その河初
役々江

五月六日半天

五月七日天気くもる

五月八日天気

五月九日天気

五月十日半天

一 御暇之御禮被為済候ニ付、先月廿二日江戸被差立
候急飛脚式人今朝到着、

御惣方様御機嫌よく被遊御座候段申来ル、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

(於千百、久光室)
一 重富西雲院との事、御七回忌被為當被成候ニ付、

御野菜 一 おり

周防殿江御機嫌伺としてしん上申上候、

永せ初

役々より

一 中官香 一 包

西雲院との御仏前江御備へ申上候、

永瀬初

役々より

一 御重の内 二重

御施の御品も御座候とて

永瀬初

被下候、

一 大年寄・御年寄勤小の嶋其外女中、此節其元江被

差越候付、諸御手當等之儀者江戸表より申越置候

通ニ而、弥去ル十日出立、道中無滞宿賦之通昨廿

六日着伏、今日川下り之筈候得共、當所江中二日

滞在被仰付候ニ付、滞無之候得ハ、六月二日其御

元着之賦ニ候、尚相替儀も御座候ハ、追々可申

越候、

二條殿御内

隠岐土佐守娘 かう

禁裏御内

女御様御附娘 ふき

楽人多参河守

娘 ひさ

下女三人

右人数於京都被召拘候付、小の嶋其外女中一列御
國許江被差越候旨被 仰付候、

御廣敷足輕

三人

御國人足

三人

右女中立方東海道廻荷物才領ニ而着伏、御内用の儀有之當所江被留置候処、前条女中江被召附候、右女中被召置候部屋取扱方等、且横井御飯屋ニ而御極被成候儀共、毎之通御取計ひ可給候、右之通及御問合候、以上、

丑四月廿七日

女中奥方
御廣敷番之頭

梶原清右衛門

伏見より

御国元

御廣敷御用人衆

五月十一日天気

五月十二日天気

五月十三日天気

一先月十九日、以

上使阿部伊勢守様、
(正弘・老中)

太守様御国許江之御暇御給、御先格之通被遊御拝

領物、從

(徳川家慶)
右大将様茂以

(信親・老中)
上使内藤紀伊守様被遊御拝領物、同廿一日 御登

城、御禮被仰上候処、御懇之被為蒙 上意、御馬

被 遊御拝領候段申来候、此旨

篤姫様江申上、御祝詞之儀者追而飛脚便 御中途

并ニ江戸江被仰上候様、御廣敷御用人江可申渡候、

五月 石見

五月十四日天気

五月十五日半天

御両殿様

若殿様

のり姫様江

御のし御茶上り、

御祝儀申上候、

御年寄初
御次迄

御内用之儀有之、先月廿六日江戸被差立候仕立町

飛脚昨夜到着、

御惣方様益御機嫌よく被遊御座候段申来ル、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

五月十五日 石見

福崎助八

篤姫様御参府付御供被仰付置候へ共、被成御免、

左候て御内用之儀有之、仕廻次第急ニ而致出府候

様被仰付候条、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

五月 豊後

一御さかな 一おり

たる水
両奥方より

永瀬初

その河

葉山

あさ

澤田

杉の

初瀬

きち江

被下候、

山桃

松壽寿院殿より

永瀬

その河初

役々江

被下候、

五月十六日雨天

五月十七日雨天

一明後十九日宝林院五拾年回忌ニ被為當候ニ付、寺

役法事執行仕候間、當日朝五ツ時御参詣被成度、

此旨御問合如斯御座候、

惠燈院

副司

丑 五月十七日

御本丸

御廣敷役所

右之通申上り、

一御香・御花・御野菜類

誠恐院
容松院
静尾院
柳 袖浦
内山 藤江
尾玉 千尾
鈴木 ため
新納 むら
種子 なつ
ぬい
のむら ゑた
大迫 ゑた
肥後 ぎん
冲瑞雲より

右之通

明十八日

(齊宮御室、齐興生母)
寶鏡院様御日柄ニ付、御備へ申上候、

五月十八日雨天

- 一 御野菜 一包
- 一 中官香 一包
- 一 安藝殿より
- 一 中官香 二わ
- 一 周防殿より
- 一 中官香 一包
- 一 安藝殿 奥方より
- 一 同 一包

今泉家
遊章院より

右之通り

宝鏡院様江御備へ申上候、

一 おまん

一 おにしめ

誠恐院

静尾院

袖うら

ため江

御施の御品被下候、

一 慢頭 一重ツ、

御備へ物申上候被下候、

一 御代参

右人数江
葉山

五月十九日雨天

五月廿日雨天

一 御代参

永瀬

五月廿一日雨天

一 篤姫様御附御側

とめ

御番人

霧か

今和泉にて今日被仰付候筈、

五月廿二日雨天

一 昨日

篤姫様御附被仰付候人数御禮ニ召つれ上り、

江澤

五月廿三日雨天

一 御代参

葉山

五月廿四日天氣

五月廿五日天氣

五月廿六日雨天

一 太守様御機嫌克去ル二日江戸被遊御発駕候段御到來、依之

御中途并江戸江来ル廿九日式中急便御祝詞可被仰上旨、

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

五月 石見

一去ル二日江戸

御発駕付、急ニ而被差立候長崎次右衛門・足輕壺人、同夜御中途浦和駄御泊宿江参上、倉ヶ野駅迄被召列御用濟被差通今朝到着、

太守様益御機嫌克御宿賦之通被遊御通行、於江戸御惣方様益御機嫌克被遊御座候段申来ル候、此旨篤姫様

典姫様江申上様御用人江可申渡候、

五月廿六日 石見

一 篤姫様江

太守様今日御機嫌よく被遊

御発駕奉恐悦候、依之御祝詞申上候、

五月二日 末河近江

五月廿七日天氣

今日

典姫様御立初ニ付、

御熨斗御茶上り、

御吸物 掛御盃

御銚子

御肴

御盃 土器

御銚子

御押

典姫様へ上り、

松壽院殿御上り被成、

御寄合ニて

御吸物 掛御盃

御銚子

御さしミ

御硯ふた物

太守様 御影

のり姫様

松壽院殿江上り、

御吸物

御惣菓子

御料理

御夜喰上り、

被召、御吸物・御酒其外被下候、

御用人初

詰合の

御医師へ

外朝いな

三益へ

澤市

御座頭上り、

仕支式日、被進并ニ被下物等ハ寶印御帳めんへ印

置候事、

江戸表先月廿九日被差立候式日中急キ今朝到着

致、

御揃被遊御機嫌克被為入候段御左右申来ル、

篤姫様御儀、未御驗御定不被為在候付、此節富印

卜被進候、此旨

篤姫様江上、以来右之通御驗召立候様可被計事、

御さかな 一かこ

松壽院殿より

永瀬初

役々江

五月廿八日天氣

御三殿様 御蔭江

典姫様江

御のし御茶上り、

御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

五月廿九日天氣

一織田安藝守様、右者以来御両敬被仰合度、於江戸

被仰進趣有之、先月廿二日被應其意候段御使者を

以被仰遣候、

右御同人様

御家内

御嫡子

出羽守様

出羽守様

奥方様

御妾腹

鑿三郎様

万寿九郎様

元丸様

御孫 於勇様

右御同人様御精進日

毎月

四月 廿日

右之通申来候条、此旨

篤姫様江上候様御廣敷御用人江可申渡候、

五月 石見

一篤姫様御道く今和泉より相廻り候、右ニ付

御さかな 一かこ

永瀬

その河初

役々江

被下候、

御側役勤

井上逸作

右者先月廿九日、於江戸當御役ニ而右之通り被仰

付候段申来候条、此旨

篤姫様申上候様ニ御廣敷御用人江可申渡候、

五月 石見

一 今日御道くしらへ江上り、今和泉より

静尾院

とめ

霧

かの

一 とんたふ 一

一 御てふし 一 樽

永瀬初

役江

今和泉より被下候、

六月朔日天気

一 宰相様

太守様

若殿様 御蔭江

典姫様江

一 御のし御茶上り、

御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

一 先月十一日御中途大井駅より被差立候急飛脚式人今日到着、

太守様益御機嫌よく御宿賦之通山中無御滞被遊御通行、同日大井駅御光着、猶御安康被遊御止宿候

段申来候、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月朔日 伊織

一 此節大年寄・御年寄勤小の嶋其外女中道行之所、

佐波河満水ニ而河留ニ付、宮市駅江去ル十五日より同十九日迄中四日滞宿、同廿一日下之関着之賦

之段者、一昨日船木駅より荷才領足輕を以申賦置

候通、今日廿二日無滞大里海相濟候、九州路今日

より日数十三日通行、相滞無候へハ来月五日其御

元着之賦ニ御座候、猶出水米之津着之上御問合可

申賦候、此旨及問合候、以上、

女中立方 梶原清右衛門

丑ノ五月廿二日 小倉より

御国元

御廣敷御用人衆

追而本文之様御年寄江茂江御達可給候、且御手當

相掛候儀者御問合申賦置候通よろしく御取計給

度、将又被召附候人数末々迄茂無滞致通行候間、

此段も申越候、

六月二日半天

仙波市左衛門

娘萬事

一 篤姫様御附御番人被召出、今日上り、

のり姫様江御目ミへ被仰付候、

六月三日天気

一 篤姫様明後五日

御本丸江御引移之筈候、此旨

典姫様江申上、大奥女中江茂申聞置候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月三日 豊後

六月四日天気

六月五日天気

一 篤姫様御事、今日今和泉より御引越候ニ付、御迎ひとして

園河 まん

今和泉へ参り候、午刻御上り被遊、

一 於御書院

御三殿様

篤姫様

のり姫様へ

一 御熨斗御茶上り、

一 御祝儀申上候、

御年寄初

御次

御番人

一 御めミへ被仰付候、

御方

初勢初

一 御目ミへ被仰付、御手熨斗被下候、

島津豊後

伊木七郎右衛門

友野市助

一 御目ミへ被仰付候、

奥医師
御廣敷医師

式御三献

長柄之御銚子 御加

篤姫様江上り、

御吸物 掛御盃

御銚子

御肴

御銚子

御盃 土器

御銚子

御押

太守様 御影

篤姫様

典姫様へ上り、

松壽院殿

周防殿

彈正殿御上り、

篤姫様

典姫様へ御對面あそはし候、

右御三方へ御熨斗御茶上り、

御吸物

御てふし上り、

周防殿

彈正殿ニハ直ニ御暇被成候、

安藝殿 御夫婦

御上り被遊、御對面あそはし候、

一 御肴 一折 御目錄書

一 赤白紗綾 二卷

太守様より

御肴 一折

赤白さあや二卷

御前様より

篤姫様江表向の被進物

御肴 一おりヲ

松壽院殿 彈正殿より

同

榎水殿 周防殿より

右ハ

篤姫様今日御上りニ付御進上、

御肴 一折

安藝殿 御夫婦より

同 一おりツ、

對馬殿

三次郎殿

奥方より

右之通進上、

御料理

篤姫様

松壽院殿へ上り、

御書院ニ而御寄合ニ而上り、

御間之物

富印御方ニて上り、

松壽院殿

安藝殿 御夫婦

御間之物・御夜喰上り、

七郎右衛門初

御廣敷

御用人

出合の

医師

御供の
御いしや

被召、

吸物・御てふし・御菓子被下候、

御座頭上り、

一 青銅 百疋ツ、被下候、

一 越後嶋

一 御肴料 二百疋

一 松壽院殿江、右ハ今日御上りニ付、

篤姫様より被進候、

一 御袴地 二反

一 御肴 五百疋

一 安藝殿江

一 越後嶋 二反

一 御肴 三百疋

右之
奥方へ

一 御袴地 二反

一 御肴料 二百疋

對馬殿江
(忠喬・今和泉家隠居)

一 越後嶋 二反

一 御着代 二百疋
 対馬殿
 奥方江
 一 御袴地 二反
 一 御着代 二百疋
 (忠冬・忠剛男)
 三次郎殿へ
 一 えち後嶋 二反
 一 御着代 二百疋
 右之
 奥方へ
 一 御はかま地 一反ツ、
 (忠剛女)
 一 御さかな代 百疋ツ、
 (忠敬・忠剛男)
 峯之助殿
 (久敬・忠剛男)
 造酒殿へ
 一 越後嶋 一反ツ、
 (忠剛女)
 お龍との
 (忠剛女)
 お才との
 (忠冬女)
 おいわたの
 (忠番女)
 おすかとのへ
 一 御はかま地 一反ツ、
 和泉 萬吉殿
 和泉 尚五郎殿
 関山 糺殿江
 一 御さかな代 二百疋
 (ツカ)
 おたきとの
 おさいとの
 おいわたのへ

一 同 二百疋
 萬吉殿
 尚五郎殿
 糺殿
 お寿賀とのへ
 一 越後嶋 一反
 遊章院江
 一 越後嶋 一反
 一 御さかな代 貳百疋ツ、
 嶋津豊後へ
 伊木
 七郎右衛門
 友の市助へ
 一 同
 右之通今日御引越ニ付、
 篤姫様より被進物并ニ被下物御座候事、
 白銀 二両ツ、
 御廣敷御用人
 六人
 永せ
 園河へ
 一 同 一両ツ、
 葉山
 あさ
 澤た
 杉の
 實印御守
 初瀬
 御側
 そて
 かち
 た代
 てや

一 同 五両
 實印御附
 梅
 さち
 たの江
 御次
 九人相中
 今和泉
 御乳持へ
 一 金子 百疋
 右之通表向の
 篤姫様より被下物
 一 越後嶋 一反ツ、
 永瀬
 園河へ
 一 さかな代 二百疋ツ、
 葉山へ
 一 越後嶋 一反
 あさ
 澤田
 杉の江
 一 御さかな代 百疋
 あさ
 澤田
 杉の江
 一 越後嶋 一反
 あさ
 澤田
 杉の江
 一 さかな代 百疋ツ、
 あさ
 澤田
 杉の江
 一 一平もとゆい紙 一束
 そて初
 御側五人
 御番人式人へ
 一 金子 五百疋ヲ
 御次・御末
 相中へ
 一 金子 五百疋ヲ
 御次・御末
 相中へ

御次

ミヤ初
御番人迄

初音初
相中へ

一 さかな代 百疋

一 同 百疋ヲ

一 同 百疋

初瀬へ
きち
たの
くめ
もと
てつへ

今日御上リニ付、右之通

篤姫様より被下候、

一 御方ニて鳥渡御盃被下候、

御年寄初

御中臈
表使迄

一 仕支ハ五節句

一 御さかな 一かこ

一 種子濱崎御相中より

一 同

一 重富御相中より

永勢初
役々江

被下候、

一 今日より御かせいニ上り、

静尾院

六月六日天気

一 道中滞無今日着致候、

一 篤姫様

のり姫様江御目ミへ被仰付、

一 御吸物・御酒色々・御とり肴物、御料理被下候、

右人数江

六月七日天気

一 東道盆

一 御さかな

一 御酒

松壽院殿御初

御五方より着を御祝被遊被下候、

小の嶋初へ

一 御肴

篤姫様

典姫様江進上、

小の嶋初
より

一 御重類其外

此節御迎ひニ下り候人数江

安藝殿 御夫婦より部やへ御入附被下候、

一 白細上布嶋 一反

一 御さかな代 三百疋

小の嶋江

一 越後嶋

一 さかな代 二百疋

花のへ

一 白細上布嶋

一反ツ、

一 さかな代 二百疋ツ、

ひて

一 毛氈

一 一枚ツ、

一 御さかな代

百疋ツ、

萬

一 平もとゆい紙

百枚ツ、

一 さかな代

百疋ツ、

ひさへ

篤姫様より右之通被下候、

一 御さかな

一 おり

一 御酒 一樽

安藝殿 御夫婦江

小の嶋初
より

一 御西瓜

一 はたんきよ 一籠

篤姫様江

安藝殿よりおり柄の御機嫌御伺として被進候、

六月八日天気

一 御代参

一 御肴 一おり

篤姫様より

安藝殿 御夫婦へ

杉の

おりからの御左右被為間度として進られ候、

六月九日天気

西瓜 三ツ

篤姫様江

安藝殿より御機嫌御伺として被進候、

福ため

御酒

篤姫様江

松壽院殿よりおり柄の御機嫌御伺として被進候、

六月十日天気

御肴 一かこ

篤姫様江御内々

對馬殿より進上被成候、

同 一かこ

篤姫様より

松壽院殿江おり柄の御機嫌被為聞として被進候、

染の

御使ニ上り、御方ニて

御目ミへ被仰付、色々被下候、

六月十一日天気

去ル朔日御中途矢掛駅より被差立候急飛脚式人昨夜到着、

太守様益御機嫌よく先月廿五日大坂被遊御発駕、

其後御宿賦之通御旅行、去ル朔日矢掛駅江御光着、

猶御安康被遊御止宿候段申来候、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月十一日

(榊山久成)
伊織

六月十二日天気

御そふめん

御年寄初

御側中へ

西瓜

御末中へ

安藝殿

おく方より

六月十三日天気

(茶成)
重富もと事

今日八ツ時すらくと安産致、御女子御出生被成

候段、御首尾申参り候、

六月十四日天気

御うなき 一重

安藝殿よりおり柄の御機嫌御伺として

篤姫様江被進候、

西瓜

安藝殿より

御年寄初

御中臈

表使へ

被遣候、

一 太守様益御機嫌よく、先月十七日伏見江御光着、

中二日御逗留ニ而同廿日河御下り被遊答候処、淀

河筋滴水ニ而御通船不被為調候ニ付、河御下り御

延引ニ而一日御逗留被相重、翌廿一日河御下り大

坂江被遊御光着、猶御安康被遊御座中三日御逗留、

同廿五日御機嫌克被遊御発駕候段申来ル候、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月 伊織

一 太守様益御機嫌克、去ル十日赤間ヶ関より大里江

御渡海、小倉江御光着、猶御安康被遊御座、御滞

無之候へハ、本廿二日御着城之賦ニ候旨申来ル、

此旨

篤姫様

典姫様申上候様御廣敷御用人可申渡候、

六月 伊織

六月十五日天気

宰相様

太守様

若殿様 御蔭江

篤姫様

典姫様江

御のし御茶上り、

御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

一 今日祇園御祭りニ付、

二 御角藏江

三 篤姫様

四 典姫様御覽ニ被為入候、

小の嶋初

一 拝見ニ参り候、

二 今日

三 安藝殿鳥渡御上りあそハし候、

四 御のし御茶上り、

五 御方ニ而御對面あそハし候、

六 御吸物 御掛盃

七 御銚子

八 御取肴

九 御さしミ

一 上り、夫より直ニ御いとま被成候、

一 周防殿妾腹江女子被致出生候、此段申上候、以上、

六月十五日 島津隼人

御本丸大奥

御廣敷番之頭衆

六月十六日天氣

一 篤姫様今日より御稽古初ニ付、

伊木七郎右衛門

二 罷出候、

一 今日富印御方ニて小の嶋初此節江戸・京都より参

り候人数を被召、御吸物・御銚子・御膳被下候、

一 同断被下候、

二 御盃被下候、

七郎右衛門

七郎右衛門

小の嶋初

右之人数江

一 去ル十三日夜

二 御中途瀬高駅より被差通候急飛脚式人今日到着、

三 太守様益御機嫌克御宿賦之通 御通行、同十三日

四 瀬高駅江

五 御光着、猶御安康被遊御止宿候段申来候、此旨

六 篤姫様

七 典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月十六日 伊織

一 篤姫様江

去ル五日

二 御本丸江御引移被為濟奉恐悦候、依之御祝詞申上

候、

六月十三日 川上筑後

三 右之通申上り、

六月十七日天氣

六月十八日天氣

一 御代参

永瀬

一 六月堂ニ参り候、

此節江戸より参り候

人数

小の嶋初

一 太守様御着城ニ付、江戸江之御祝儀當日急飛脚便

可被仰上旨、

二 篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月 伊織

六月十九日天氣

一 御肴 一 おり

二 篤姫様

のり姫様より

三 同 一 おり

永瀬初

役々より

右ハ重富御七夜御祝ニ付進られ、進上申上候、

六月廿日天氣

一 御西瓜 五

二 篤姫様

のり姫様江

三 樂水殿

四 周防殿よりおり柄ニて被進候、

五 同

六 右御式方より

小の嶋初

御右筆間へ

一 御西瓜

松壽院殿

彈正殿江

篤姫様

一 典姫様より折柄ニて被進候、

御そふめん

讚岐殿 御夫婦

又四郎殿 御夫婦より

(典教・垂水家嫡子)

永瀬

園河初

役々

あさ江

被遣候、

一 御肴 一 かこ

讚岐殿 御夫婦

又四郎殿 御夫婦江

永瀬初より

進上、

一 御さかな 一 かこ

右御人数より着を御祝、被下候、

花のへ

一 御肴 一 おり

一 御酒

松壽院殿御初御五方へ

先日御禮旁ニ進上、

小の嶋初

とんたふ

御酒

惣おく方江

小の嶋初

より

進上、

一 太守様益御機嫌克 御宿賦之通御通行、一 昨十八

日佐敷 御立、同日七ツ半過出水御仮屋江 御

光着、猶御安康被遊御座候段同所より申来候、此

旨

篤姫様

一 典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月廿日 伊織

六月廿一日天気

一 鯉并鱸

御中途より

一 御姫様江被進候段申来ル

一 右御肴

今和泉對馬殿 御夫婦

三次郎殿御夫婦江

篤姫様より被進候、

一 太守様益御機嫌能、一 昨十九日六半時出水御立、

同日八時阿久根江 御光着、御安康被遊御座候段

申来候、此旨

篤姫様

一 典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月廿一日 伊織

一 太守様益御機嫌能、昨廿日六半時阿久根御立、同

日七時過向田江 御光着、猶御安康被遊御座候段
申来候、此旨

篤姫様

一 典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月廿一日 伊織

六月廿二日天気

一 太守様益御機嫌克、今日九ツ時御すらくと

御着城被遊、大奥江御入、

一 御佛間へ御拜ニ被為入、

於御書院

篤姫様

典姫様

一 松壽院殿江御對顔あそハし候、

一 宰相様御初

御惣方様上り、

一 御熨斗御茶上り、

一 御祝儀申上候、

小の嶋初

若年寄

御中臈

表使迄

御廣敷

御用人

御屋鋪方

御年寄

一 御通りかけ御めミへ被仰付候、

御側初

御次迄

御祝儀ニ上り、

誠恐院

御目みへ被仰付候、

右同人江

御三肴

長柄の御銚子 御加

御臈煮

御吸物 掛御盃

御銚子

御肴

御銚子

御盃 土器

御銚子

御押

太守様

篤姫様

のり姫様江上り、御取代し被遊候、

御休息并ニ御方々へ被為入、

御熨斗御茶上り、直ニ御表へ被為入、七ツ時分大

奥へ御入被遊、御休息ニ而

御間之物御寄合ニ而上り、

安藝殿

周防殿

弾正殿ニも御上り、御對顔あそへし同断上り、

御吸物 掛御盃 御肴組付ニ而上り、

御銚子

御盃 土器

御てふし

御押上り、

松壽院殿御初御取代し被遊候、

御吸物

御硯ふた物

御さしミ

御井物色々

御惣菓子

御料理ニ汁五菜

上り、

松壽院殿御初へ同断上り、

御夜喰上り、

御休息ニ而御目ミへ被仰付候、

御奥醫師

御休息へ被召、吸物・酒・御取肴物・御惣菓子被

下候、

御用人初 詰前 奥醫師

同断被下候、

御肴 一 おりヲ 御年寄初 惣女中へ

御肴 一 おりヲ

松壽院殿御初御五方より相替らす御進上、

御肴 一 おり

進上、 誠恐院より

さかな代 式百疋

右御帰しニ被下候、 右同人江

御さかな 一 おり

松壽院殿御初御五方より相替らす被遣候、

小の嶋初 役々江

御祝儀ニ上り、

澤市

霧之市

青銅 百疋ツ、御座頭四人江相替らす被下候、

御肴 一 おりヲ

篤姫様

典姫様へ

松壽院殿御初御五方より御進上、

御休息ニ而御吸物・御酒、其外色々被下候、

誠恐院江

一 太守様益御機嫌克、今晚七半時苗代川 御立、午刻 御着城可被遊旨申来候、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月廿二日 伊織

嶋津右門

一 右者浦賀表江此節異国船渡来ニ付而へ、江戸御屋鋪詰少人数ニ而候間、急ニ而出府被仰付候、此旨 篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月 豊後

去ル二日江戸被差立候式日中急齋藤五右衛門・足輕老人今日到着、

御惣方様益御機嫌克被遊御座候段申来ル、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月廿二日 伊織

一 篤姫様
典姫様江

御側御用人
御側役より

暑中御機嫌伺、且

篤姫様御本丸へ御引移り御祝儀、此節の御便より
申上り、

一 御肴 一 おり

誠恐院より

篤姫様江進上、

一 御髪さし并ニ御かうかい

篤姫様江御側より被進候、

一 御手遊物色々

のり姫様江御側より被進候、

一 御機嫌克 御目覚、

一 御佛間へ御拝ニ被為入候、

一 御菓子并ニ平籠二ツ、

一 松壽院殿御初御五方江相替らす参らせられ候、

一 篤姫様

典姫様へも被進候、

一 右同断被下候、

一 西瓜

周防殿より昨日之御禮、御機嫌御伺として御進上、

一 御くわし・ひれ籠

被下候、

一 御重之内

誠恐院
南林寺より

進上、

一 御代参

永せ

右妊娠之段申来候条、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

六月 伊織

六月廿四日天気

一 御機嫌よく 御目覚、

一 御佛間江 御拝ニ被為入候、

一 篤姫様

一 典姫様江 御對面あそハし候、

一 篤姫様事、

今日御香御けいこ御休そくニ而あそハし候、

一 右ニ付

一 罷出、御目見へ被仰付候、

一 御側ニ而御菓子被下候、

一 御てうらん 三

一 うちわ 五本

一 思召さまニ被下候、

一 御そふめん・西瓜上り、

一 御使ニ上り、

一 御素めん 一 おり

一 太守様江

若年寄格
すま事

伊木七郎右衛門

伊木
七郎右衛門江

今いっみ
江沢

安藝殿より

一同

一 篤姫様

一 典姫様江

御同方様より右之通おり柄の御機嫌御伺として御

進上、

一 御素めん 一 臺

一 御着城御機嫌伺として進上、

大乘院より

一 右御帰りニこんふ・御煎茶被下候、

一 御茶・御くハし

一 被下候、

一 御てうらん・御うちわ

一 安藝様 御おく様へ

進上、

一 御機嫌克 御目覚、

一 御佛間江 御拝ニ被為入候、

一 篤姫様

典姫様へ 御對面遊ハし候、

一 今日より篤姫様御仕立物御かせいと上り、御

着城御祝儀も申上候、

南林寺へ

永瀬

園川初

御側迄より

袖浦

藤江

千ほ

御目見へ被仰付候、

一 吸物・酒・御取肴・御膳被下候、詰所より右之人數
江

一 御肴 一 おり

百疋

右今日進上物致候、

静尾院より

一同 一 おり

百疋

袖浦

藤江

千ほ

進上、

一金子 二百疋

静尾院へ

一同 百五十疋

三人へ

右之通被下候、

一 御そふめん

樂水様

周防様江

篤姫様

典姫様より被進候、

一 太守様四ツ時御供揃ニテ

五社并ニ福昌寺・恵燈院へ御参詣被遊候、

六月廿六日天気

一 御機嫌克 御目覚、

御佛間江 御拜ニ被為入候、

一 今日四ツ時御供揃ニテ

大王山・南林寺・寿国寺へ

御参詣あそはし候、

一 篤姫様

典姫様江御對面あそはし候、

一 西瓜・なし・たいく

進上、

一 御重の内・御酒

安藝殿より被下候、

南林寺より

永せ

園川

葉山へ

六月廿七日天気

一 御機嫌よく 御目覚、

御佛間江 御拜ニ被為入候、

篤姫様

典姫様へ 御對面、

一 瓜 一 臺

太守様江

一 同 一 籠

兵庫殿より御進上、

一 同 一 籠

加治木より被下候、

小の嶋初

役江

一 西瓜 一 臺

太守様より

安藝殿江おり柄ニテ参らせられ候、

一 御肴 一 かこ

安藝殿へ進上、

一 西瓜

永せ

は山より

太守様より

松壽院殿

彈正殿江おり柄ニテ参らせられ候、

一 生なからめ 一 桶

太守様へ

松壽院殿より御進上、

一 御祝儀御機嫌伺ニ上り、

御目見へ被仰付候、

一 御肴 一 おり

二百疋

一 西瓜 五

進上、

一金子 三百疋

一 御包之内 あせ取一・銀髪さし一本・袖おとし・さけたはこ入・はしさし

一 うちわ 七本

太守様より被下候、

留のへ

六月廿八日半天雷

一 御機嫌よく 御目覚、

御佛間江 御拜ニ被為入、

篤姫様

典姫様へ 御對面、

一 宰相様 御蔭

太守様 御出座

若殿様 御蔭

篤姫様

典姫様へ

御のし御茶上り、

留のより

御祝儀申上候、

小の嶋初
御次迄

一 御肴 一籠

一 御重の内 二 御くはし

一 御かこの内 なかこ瓜

一 御着城御機嫌伺として

進上、

豊昌院より

一 御肴 一かこ

一 瓜 一かこ

一 楽水殿

一 周防殿へおり柄にて参らせられ候、

六月廿九日天気

一 御機嫌克 御目覚、

一 御籠之内 御かく
なし

一 楽水殿よりおり柄の御機嫌御伺として御進上、

一 惣奥方江来月朔日ニ御参上被成候様御案内出し候

事、

一 典姫様江御側より色々被進候事、

一 御うちわ 二拾五本ツ、

一 篤姫様

一 典姫様江被進候、

六月晦日天気

一 御機嫌克御目覚、

一 御佛間へ御拝ニ被為入候、

一 御うちわ 七本ツ、

一 松壽院殿

一 楽水殿

一 周防殿江御到来被遊候とて参らせられ候、

一 御てうちん 三ツツ、

一 御うちわ 七本ツ、

一 兵庫殿 讃岐殿

一 對馬殿江も参らせられ候、

一 朝鮮飴

一 御うちわ 十三本

一 半切百枚・御盃・手ぬくい二筋

一 被下候、

豊昌院へ

一 うなき 一重

一 御やさい 一籠

一 進上、

法苑院より

一 鳴ひろうと

一 御箱せこ 一

一 数多はこ入 五

一 錦手

一 紅付うかい茶碗 一

一 御まゆはけ 一箱

一 しをり二・香箸さし二・御盃 一

一 篤姫様へ

花の

一 千代紙 三十枚

一 御箱せこ 一

一 猪口 五箱

一 御箸さし一・かう箱 一

御同方様江 一 御同方様江 五十枚ツ、 一 染紙双六 一ツ、添 一 御肴 一おり 三百疋 一 同 一おり 二百疋 一 右 一 篤姫様へ此節着越候付、御ミやとして進上、 一 硝子 一箱物 一 御人形 一 御手遊ひ物 五 一 典姫様江 一 千代紙 二十五枚 一 御巾着 一 一 御手遊ひ物 三 一 千代紙・錦絵 一 同 一 右之通 一 典姫様江進上、 一 御巾着 一 御人形 一 御まり 一 おちん 一 からく 一 典姫様江 一 小の嶋より

一 千代紙・錦絵 五十枚ツ、

一 染紙双六 一ツ、添

一 御肴 一おり 三百疋

一 同 一おり 二百疋

一 右 一 篤姫様へ此節着越候付、御ミやとして進上、

一 硝子 一箱物

一 御人形 一

一 御手遊ひ物 五

一 典姫様江 一

一 千代紙 二十五枚

一 御巾着 一

一 御手遊ひ物 三

一 千代紙・錦絵 一

一 同 一

一 右之通 一

一 典姫様江進上、

一 御巾着 一

一 御人形 一

一 御まり 一

一 おちん 一

一 からく 一

一 典姫様江 一

一 小の嶋より

一 小の嶋より

一 小の嶋より

一 御品々
 一 篤姫様江進上、
 一 御半切 一箱 御猪口 五箱
 一 松壽院殿江
 一 御半切 二箱 御猪口 一箱
 一 樂水殿江
 一 御半切 一箱 御肴代 百疋
 一 安藝殿江
 一 千代紙 一箱 御肴代 百疋
 一 安藝殿
 一 奥方江
 一 錦絵 一箱 三十七枚入
 一 御猪口 七箱 御うちわ 三本
 一 周防殿江
 一 御半切 二箱 御さかつき 二箱
 一 彈正殿江、右之通此節持越候とて進上、
 一 松壽院殿江風流手ぬくひ十筋・きやまん猪口二
 一 安藝殿江御半切二箱・きやまん御ふうちん一箱
 一 周防殿江御半切一箱・きやまん御ふうちん一箱
 一 彈正殿江御盃三箱・御菓子入一箱
 右之通持越候付進上、
 一 七月朔日天気
 一 御機嫌克 御め覚、
 一 御佛間へ御拝ニ被為入候、
 一 篤姫様
 小の嶋初より
 小野嶋より
 花野より

一 典姫様へ御對面被遊候、
 一 宰相様 御蔭
 一 太守様
 一 若殿様 御座
 一 御熨斗御茶上り、
 一 御祝儀申上候、
 一 御着城の御祝儀申上候、
 一 御目ミへ被仰付候、
 一 御肴 一 おりヲ
 一 御進上、
 一 御吸物・御銚子
 一 御とり肴物・御さシミ
 一 御菓子
 一 上り、
 一 毎之通御菓子御側より被下候、
 一 御包之内 一ツ、
 一 讚岐殿
 一 三次郎殿
 一 奥方へ
 一 思召さまにて被遣候、
 一 御肴 一 おり
 一 篤姫様
 一 典姫様御相中江
 御年寄初
 御次迄

一 平もと紙 二束
 一 加治木
 一 奥方より
 一 右奥方より
 一 御さかな 一かこ
 一 御包之内
 一 御たはこ
 一 一同
 一 もゝ類
 一 御さかな 一かこ
 一 讚岐殿
 一 奥方より
 一 三次郎殿
 一 小の嶋
 一 永せ
 一 園河
 一 花の初
 一 御中臈
 一 表使迄
 一 小の嶋初
 一 役々江
 一 小の嶋
 一 永瀬
 一 園河江
 一 花の
 一 葉山
 一 あさ
 一 沢た
 一 杉のへ
 一 ひて
 一 榎尾
 一 た河へ
 一 御側
 一 御次
 一 御末中へ

奥方より

小の嶋初
役々江

右之通御おくり被成候、

御包之内

篤姫様より

右奥方江

参らせられ候、

向井新兵衛

右當秋

篤姫様御参府付、御側御用人之場にて御供被仰付候、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月 豊後

御取次

谷川次郎兵衛

誠恐院事

誠恐院之方

右

常興善院様御実母ニ而、其外御子様方御誕生茂被為在、御訳柄旁別段之以

思召、右之通被 仰付候、左候て席順真如院之方(齊宣御室)

次被 仰付候、此旨向々江可申渡候、

七月 豊後

誠恐院之方

右者年中被成下候諸分、以来御用部屋計ニ而被成

下候、左候て白米之儀(齊興御室久光生母)ハ於遊羅之方同様被成下、

御臺所より相渡候様 被仰付候旨御廣敷御用人江

申渡、可承向江茂可申渡候、

七月 豊後

右被仰付候ニ付、

誠恐院之方

より

一御両種五百疋進上、

一御目ミへ被仰付候、

右同人江

一とんたふ

兵庫殿

奥方へ

進上、

一御肴 一おり

篤姫様江進上、

誠恐院方より

七月二日天気 夕方少し雨

一御機嫌克

御目覚、

御佛間江 御拝ニ被為入、

篤姫様

典姫様江 御對面、

一御着城 御祝儀ニ上り、

安藝殿

奥方

於御書院御目見へ、

一御肴 一おり

安藝殿

奥方より

進上、

夫より

篤姫様御方へ御出被成、御吸物・御酒・御膳等御戴被成候、其後御休息江被召上、御側ニ而御茶御くハし被下候、

一紅紋縮面なるみしほり 一反

一御包之内

安藝殿

奥方へ

一御重の内 一組

太守様江進上、 奥方より

一燒物重御ふた物色々御入付、

篤姫様江

御同方より

一御肴

一御干菓子 一箱

典姫様江 御同方より

右之通進上、

一御さかな 一おり

一御重の内・御酒

小の嶋初

御中臈

表使迄

永瀬初

役々

御側

一同二品

富印
御側迄

小の嶋初

江戸
人数江

右之通奥方より御おくり被成候、

七月三日半天

御機嫌克御め覚、

御佛間へ御拝ニ被為入候、

篤姫様 典姫様へ御對顔あそはし候、

御茶 一箱

昆布 一箱

南泉院江

被下候、

七月四日天気

御機嫌よく 御目覚、

御佛間江 御拝被為入、

篤姫様

典姫様江 御對面遊ハし候、

御角蔵江町おとり拝見ニ参り候、

皆々

篤姫様御附

表使格
御守

とめ

右之通被仰付、名も

関のと

改名被仰付候、

御同方様御附

御同方様御附

御側女中
御手替り

つる

御側女中

まん

ひさ

かの

右之通被仰付候、

名被下候、

つる事

ふく

まん事

きの

ひさ事

つさ

かの事

やの

御休息所御方

御中臈見習

幸

ふき

右之通被仰付候、

名被下候、

幸事

りく

ふき事

ゆき

御肴 一おり

篤姫様江進上、

外ハ進上なし、

関のより

七月五日天気

御機嫌克 御め覚、

御佛間へ 御拝ニ被為入候、

篤姫様 典姫様へ御對顔あそはし候、

一とんたふ

一御酒

安藝殿

奥方へ

小の嶋初

役々

御側中より

一篤姫様御附御次女中老人被召拘へ、名

八重

七月六日天気

御機嫌よく 御目覚、

御佛間江 御拝ニ被為入候、

典姫様江 御對面、

篤姫様ニハ少々御風氣ニ被為入、今日ハ御仕舞

不被遊候、

一御肴 一おり

百疋

御着城御祝儀御機嫌伺として

太守様へ進上、

よふ松院より

一先月十九日江戸より被差送候急飛脚式人今日到

着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来ル、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月六日 豊後

七月七日雨天

御機嫌克 御め覚、

御佛間御拜ニ被為入、

於御書院

宰相様 御影

太守様 御出座

若殿様 御影

篤姫様御事御少し御不例ニ付御影、
のり姫様へ

一 御熨斗御茶上り、

一 御祝儀申上候、

小の嶋初

御年寄

御用人

若年寄

御中臈

表使初

御次迄

御そふめん

御盃 土器

御銚子

御押

太守様

篤姫様

典姫様江上り、

種子より御使として上り、

御そふめん

太守様江

萩の

同

篤姫様

典姫様御相中へ

松壽院殿

彈正殿より御進上、

一同

右御式方より被遣候、

一 御さかな代 式百疋

御掃しとして

被下候、

小の嶋初
役江
よふ松院へ

七月八日半天

御機嫌克 御目覚、

御佛間江 御拜ニ被為入候、

一 今日も篤姫様御仕舞不被遊候、

越後嶋 二反

松壽院殿江御土産として参らせられ候、

同 二反

(南部信順女、重慶孫、島津貴敦等)
於朝殿へ御土産として参らせられ候、

七月九日雨天少く風

御機嫌克 御め覚、

御佛間へ御拜ニ被為入候、

篤姫様今日も御仕舞不被遊候、

御重の内

太守様江

一 唐芋

篤姫様江

安藝殿より御機嫌御伺として御進上あそはし候、

御休息所御方

大年寄

御年寄勤

小の嶋

右同

表使

槇尾

篤姫様御附

表使格

御守勤

関野

御休息所御方

御中臈見習格

御祐筆勤

そめ

篤姫様御附

御側女中

御守御手替り

ふく

右同

御側女中

なみ

きの

つさ

やの

御休息所御方

御三之間格

御中居勤

やさ

老
篤姫様御附

御次女中

八重

もと

御休息所御方

御半下

みゆき

さくら

右者

篤姫様御参府付御供被仰付候条、此旨相達候様御
年寄江可申達旨、御廣敷御用人江可申渡候、

七月 豊後

一 白紺上布 二反

一 嶋袖 一反

一 白紋縮緬 二反

小の嶋へ

一 緋紋縮緬 一反

一 白紋縮緬 一反

一 紺上布 一反

槇尾へ

外ニ嶋袖一反、右ハ別段

御内ニ拜領被仰付候、右同人江

一 緋紋縮緬 一反

一 白紋ちりめん 一反

一 嶋ちりめん 一反

関野へ

一 緋紋縮緬 一反

一 白紋ちりめん 一反

御手代り

ふくへ

一 緋紋ちりめん 一反ツ、

一 白同 一反ツ、

御側女中

なみ

きの

つさへ

一 嶋ちりめん 一反

一 白紋ちりめん 一反

やの

一 白縮緬 一反ツ、

御次女中

もと

八重へ

一 嶋ちりめん 一反ツ、

一 紺上布 一反

一 唐ひちりめん 一反

御三之間格

やさへ

一 白ちりめん 一反ツ、

御末

みゆき

桜

右

篤姫様御参府ニ付、御内ニ

太守様より拜領被仰付候、

一 小豆さあや 一反ツ、御例ニハなく御内ニ被

下候、

みゆき

さくらへ

御用有之、先月廿三日江戸被差立候急飛脚式人昨

夜到着、

御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来候、此旨

篤姫様

典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月九日 豊後

七月十日天気

一 御機嫌克 御め覚、

御佛間へ御拜ニ被為入候、

一 太守様御事、今日八ツ時御供揃ニ而磯御茶屋江
御滞在ニ被為入候、

七月十一日天気

一 御機嫌克御滞在あそハし候、

一 磯より御狐之御さかな被下候、

外ニ鹿之枝

小の嶋初へ

一 御肴 一おり

篤姫様より

三次郎殿 御夫婦江

一 同 一かこ

篤姫様より

對馬殿

安藝殿

奥方江

右之通被進候、

一 金子 式十両

一 同 三両

誠恐院方へ

外ニ金子方ニ附候四拾四兩二朱と一匁、

盆暮ニ被下候

當月被下候事、

一同 式両ツ、

永瀬初
御側迄
十六人

一同 十両

ひて

一同 老両式分ツ、

御次女中
ミヤ初

九人
やさへ

一同 老両ツ、

御半下
聡角初
十一人

一同 三両式分ツ、

うた
かえ
てつ
さく
ちか

一同 三分

御庭方
三人

一同 三分

御庭方人足
六人江

一同 老両式分

一同 老両老分ツ、

初瀬
きち
たの

一同 老両ツ、

外二
くめ
老人

右例年之通御内々被下候、

七月十二日天気

御機嫌よく 御滞在被遊候、

七月十三日天気

御機嫌克今日七ツ半時御供揃ニ而御帰殿被遊、夫より

御佛間へ御向火ニ被為入、御拝ニ被為入候、

御野菜 一 おり

御香 一 わ

安藝殿より

御香

周防殿より、右盆ニ付

御佛間へ御備へ被成候、

御香

御花

御野菜

御香

御佛間へ御備へ申上候、

誠恐院方より

今和泉

遊草院より

御燈籠

西瓜

鈴木宝熊より

御香

御野菜 一 おり

御側中より

相替らす盆ニ付御備へ申上候、

御獵之御着 式籠

篤姫様

典姫様江磯より被進候、

右之御香

篤姫様より

三次郎殿御初、御諸子方へ参らせられ候、

御香奠 式百疋

大信院様へ

(重妻)
(重妻女・桑名舊主松平定和室)

柔正院様

高輪
御子様方より

一同 百疋

(齊臣)
大慈院様へ

(重妻女・大垣藩主戸田氏正室)
ちか姫様より

一同 五十疋

(久野・重妻男)
本光院様江

ちか姫様より

右之通御備へ被遊候ニ付、御寺へ相廻し候事、

當十月十日

大慈院様拾三回御忌被遊御當候ニ付、八日より十日迄日数三日、於福昌寺御法事御執行被仰付筈候、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月 多門

七月十四日天気

御機嫌よく御目覚、

御佛間江 御拝ニ被為入、御灵膳御上ケ被遊候、

今日四ツ時、御供揃ニ而福昌寺・恵燈院・浄光明

寺・南林寺・寿国寺御仏参あそハシ、八ツ時過御

帰殿被遊候、

篤姫様今日夕方御仕舞ニ而御對面あそハシ候、

福昌寺・恵燈院・浄光明寺・興国寺・良英寺へ御

代参、

右ニ付拜見かたく御参り申上候、

永瀬

小の嶋

七月十五日天気

御機嫌克 御め覚、

御佛間へ御拝ニ被為入、御灵膳御上ケあそハシ候、

篤姫様 典姫様へ御對面あそハシ候、

宰相様

太守様

若殿様

篤姫様

典姫様へ

御熨斗御茶上り、

一中元の御祝儀申上候、

小の嶋初

御次迄

御硯ふた

御銚子

太守様江

篤姫様 典姫様より御上ケ被遊候、

御肴 一おり

太守様より右御生身魂ニ付

御式方様江被進候、

御重の内

御銚子

太守様江

周防殿よりおり柄ニ付御進上、

御肴 一かこ

周防殿江右御帰しとして被進候、

御重の内

御銚子

篤姫様より

安藝殿 御夫婦へ

右御生身魂ニ付被進候、

南林寺・寿国寺へ御代参、

右へ拜見ニ参り候、

葉山

小の嶋

やさ

七月十六日天気

御機嫌よく 御目覚、

御佛間江 御拝ニ被為入候、

篤姫様

典姫様江 御對面、

御野菜 二臺

御庭方より右之

御野菜一籠

篤姫様へ被進候、

一當九月十一日

觀光院様式拾五回御忌被為當候付、於 福昌寺御

法事一日御執行被仰付筈候条、此旨

篤姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月 豊後

七月十七日半天

御機嫌克 御め覚、

御佛間へ御拝ニ被為入候、

篤姫様 典姫様江御對面あそハシ候、

七月十八日天気

御機嫌克 御目覚、

御佛間江 御拝ニ被為入候、

篤姫様 典姫様江御對面、

松壽院殿 案水殿

安藝殿 周防殿

彈正殿 八ツ後御上りあそハシ候、

御休息ニて御對面、

御西瓜

御茶上り、

御吸物 掛御盃

御肴御組付

御硯ふた
御さしみ
御鉢の物
御茶碗物
御膳上り、
夜ニ入五ツ半時比御暇あそはし候、
御うなき料 三百疋
御五方より御進上、
御菓子
篤姫様
典姫様へ
御五方様より被進候、
しふ縮緬 一反ツ、
御包之内 一ツ、 御品ハ御側へ御居留上候事、
松壽院殿御初
御五方江参らせられ候、
御肴 一かこ
御五方様より
御祝儀、御機嫌伺御上り、
御目見へ被仰付候、
御肴 一おり
進上、
一さかな代 貳百疋
御帰し、

小の嶋初
役々江
法苑院
法苑院より

御包之内 御反物一反
御側より被下候、 御二品
御肴 一おり
篤姫様江 百疋
さかな代 二百疋
御帰し、
御包之内
篤姫様より被下候、
御用之儀有之、去ル四日急ニ而江戸被差立候植村
仲蔵・足輕壱人今日到着、
御惣方様益御機嫌能被遊御座候段申来ル、此旨
篤姫様
典姫様江申上候様御廣敷御用人江可申渡候、
七月十八日 豊後
御養料米貳拾俵
御年寄
樂水殿御附
森岡
右者病氣ニ有之、永之御暇被下度申出趣有之、願
之通御暇被下候、数十年首尾能相勤候付、諸給分
取込拜借被下物被仰付、一世右之通被下置、以来
大奥江罷上、御祝儀、伺御機嫌等申上候様被仰付
候、右申渡
篤姫様達

法苑院へ
法苑院より
同人江

御聴候様御廣敷御用人江可申渡候、
七月 豊後
七月十九日半天
御機嫌克 御目覚、
御佛間へ御拜ニ被為入候、
篤姫様 典姫様へ御對顔あそはし候、
江戸表先月廿九日被差立候式日中急今朝到着、
御惣方様御機嫌能被為入候段御左右申来ル、
七月廿日半天
御機嫌よく 御目覚、
御佛間江 御拜ニ被為入候、
篤姫様 典姫様江御對面、
かすつけ
竹の子 一重
松壽院殿より御進上、
御重の内 一組
御肴 一おり
御酒 一樽
篤姫様江おり柄御機嫌御伺として御進上、
峯之助殿
おたつとの
おさいとのより
右御初を
太守様へも御上りあそはし候、

(水戸藩主徳川齊脩室)

峯寿院様御不豫之處御養生不被為叶、先月廿六日御逝去之段、從公義被仰渡候、依之今日より來ル廿六日迄日数七日鳴物令停止、普請者不苦候、此旨

篤姫様江申上、大奥女中江茂申聞候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月廿日 豊後

七月廿一日天氣

御機嫌克 御め覚、

御佛間へ御拜ニ被為入候、

篤姫様 典姫様江御對面あそハし候、

御提灯一對ツ、

大乘院・浄光明寺・惠燈院江御備へ被遊、

御年寄

御中臈 たつ

右之通被

仰付、 楽水殿江被附置候、此旨 篤姫様へ申上候様御廣敷御用人江可申渡候、

七月 多門

御中臈

御側

ぬい

右之通被 仰付、楽水殿江被附置候、

右之通被仰付、たつ事森岡ト改名被仰付候、

御休息ニ而御目ミへ被仰付候、

御肴 一 おり

御てふし 一

今日結構ニ被仰付候ニ付、進上申上候、

森岡より

御さかな 一 おり

小の嶋初

惣中江

森岡

ぬいより

此方よりも同断御歸し致候事、

七月廿二日天氣

御機嫌克 御め覚、

御佛間へ御拜ニ被為入候、

篤姫様 典姫様江御對面あそハし候、

御肴 一 おり

太守様江

垂水

お貞とのより

右ハ当年御初雛ニ付、御拝領物等被成候御禮として御進上、

七月廿三日雨天

御機嫌克 御目覚、

御佛間へ御拜ニ被為入候、

今日より四ツ時御供揃にて磯へ御滞在ニ被為入、篤姫様 のり姫様へ御對面あそハし候、

右御供

小の嶋

花野

ひて

た川

そて

たよ

そめ

ミ尾

やさ

聡角

七月廿四日雨天

御機嫌克御滞在あそハし候、

七月廿五日半天

御機嫌克御滞在被遊候、

一 鮎 一 かこ

磯より

篤姫様

典姫様江被進候、

篤姫様御附御側女中老人被召拘へ上り、名も

なみと

被下候、

篤姫様

のり姫様へ御目ミへ被仰付候、

なみへ

七月廿六日天氣

一 御機嫌克御滞在あそハし候、

七月廿七日天気

一 御機嫌克御滞在被遊候、

一 篤姫様御事、今日五ツ時御供揃ニ而磯へ御入あそ

ハし候、夜九ツ時前御帰り、

一 御肴 一 おり

御料理三百疋

一 御酒 一 荷

一 御重 一 組

一 太守様江

一 篤姫様より御上ケ被遊候、

一 色々結構成御品々

一 太守様より御戴被遊候、

一 御供

御かせいながら

園川 榎尾

関野 御側

御側 四人

御次 兩人

静尾院

一 御かせいとして参り候、

かち

てや

みよ

みゆき

さくら

一 進上、

一 御肴 一 おり 二百疋

園川

榎尾より

一 さかな代 三百疋

一 右御帰しとして被下候、

園川 榎尾へ

一 あみ御引かせあそハし候とて、

一 御さかな 一 かこ、御酒 一 樽

永瀬初

御留守中江

七月廿八日天気

一 御機嫌克御滞在被遊候、

一 太守様御事御目ミへ御座候ニ付、一刻御帰殿被遊、

一 御佛間へ御拝ニ被為入、

一 篤姫様 典姫様へ御對面あそハし候、

一 宰相様

一 太守様

一 若殿様

一 篤姫様

一 典姫様へ

一 御熨斗御茶上り、

一 御祝儀申上候、

御年寄初

御次迄

一 御くつまん・御煮染上り、

一 御直ニ御表へ被為入候、

一 篤姫様御附御側

一 今日より五夜の御暇ニ而下り候、

一 さかな代 式百疋

一 篤姫様より被下候、

きの江

七月廿九日天気

一 御機嫌克御滞在あそハし候、

一 江戸表去ル十三日被差立候急キ御飛脚今朝到着、

一 御揃被遊御機嫌克被為入候段御左右申来ル、

一 篤姫様御附御手替り 一 おり

一 今日より一廻りの御暇戴下り候、

一 さかな代 式百疋被下候、

右ふく江

